

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520475

研究課題名(和文)前提研究の新アプローチ：前提条件操作の限界事例からの検証

研究課題名(英文)Exploring limits for presupposition manipulation

研究代表者

首藤 佐智子 (Shudo, Sachiko)

早稲田大学・法学大学院・教授

研究者番号：90409574

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、前提を伴う言語形式の運用のしくみを明らかにすることを目的として、近年問題視されている表現をとりまく言語現象を考察した。研究成果として特筆できるのは、ポライトネス効果を狙った語用論的制約の操作使用の結果、意味が客観化するという現象を指摘することができたことである。これはポライトネスが意図された語用論的制約操作が行われた場合に、その意図が形骸化するという社会言語学的パラドックスが存在することを示唆する。この現象のモデルとして扱った「残念な」に関する分析は、「日本語語用論フォーラム」の第1号(2015年刊行予定)に掲載される予定である。

研究成果の概要(英文)：Linguistic expressions whose usages are pragmatically constrained may be used even though their pragmatic constraints are not satisfied. Those usages are often regarded as prescriptively “wrong.” This project investigated such linguistic phenomena with respect to how the usages are received in practice. I have observed, when such usages with pragmatic manipulation are intended for politeness effects, the meaning of the linguistic expressions becomes objectivized. This means that there is paradox such that usages with manipulation of pragmatic constraints for politeness will result in the nullification of politeness effects. This analysis will appear in the first issue of Nihongo Goyoron [pragmatics] Forum (Kato, Shigehiro (ed.), in press).

研究分野：言語学、語用論

キーワード：語用論 前提 操作 ポライトネス フェイス威嚇 前提操作 客観化 制約

1. 研究開始当初の背景

言語形式の中には、使用に際して、発話時点のコンテキストに制約を課すものがある。このコンテキストに対する制約は「前提」と見なされ、そのような言語形式を含む文が伝達する意味の一部とされている。このような前提を引き出す言語形式は前提導入表現と呼ばれ、意味論あるいは語用論の枠組みでのみ研究されてきた。前提導入表現は、時にコンテキストが制約を満たさない場合にも使用されることがあり、Lewis(1975)は、この現象を、聞き手がコンテキストに前提とされた情報を付け加えるという「調整」を行うと説明した。しかしながら、前提条件の操作や調整に関しては、これまでほとんど体系的な説明がされてきていない。Lewis自身が、調整は「ある程度の範囲」で起こると限定しているが、その範囲や調整を意図した前提の操作に関する研究はこれまでされてきていない。前提条件の操作は日常生活で頻繁に行われているが、その使用における意図や聞き手に与える印象などを検証することは言語学的な研究としては成立しにくい。談話標識や談話スタイルに関しては、使用の意図やその機能が多くの談話分析の研究の対象となっている一方で、前提表現のような言語形式に関して、その意図や機能の研究は行われていない。操作が行われた時の聞き手の認知メカニズムを客観的に叙述することが困難であることが、前提操作という現象の分析を妨げている。申請者は、1990年代から前提と談話機能に関する研究を行い、博士論文(1998)及びその後の研究で「も」や他の言語における同種の前導入表現(英語の even や too、韓国語の to)に関する分析に談話の視点を加えた考察を行ってきた(Shudo 2002, 首藤・原田 2008, Shudo 2008a, Shudo 2008b, Shudo 2008c, Shudo 2010)。また、「じゃないですか」(ケネラー[=首藤] 1999, Shudo 2003)や「よろしかったでしょうか」(首藤 2007, Shudo & Harada 2009, 首藤・原田 2009, 首藤 2011)の近年における使用を前提条件の操作とみなす考察を行い、聞き手の否定的反応をポライトネス理論(Brown and Levinson 1987)におけるフェイス威嚇行為によって説明することを試みた。これらの研究は申請研究のパイロットスタディーとして機能した。

本研究はこれまで意味論・語用論の枠組みで研究されてきた前提の概念に談話分析や相互行為論の視点を加えた点が新しいアプローチである。問題視されて言語使用を規範的なアプローチから考察するのではなく、特定の言語表現の使用が「問題」とみなされることを「前提条件の逸脱」とみなし、言語使用者の主観的データを前提条件の構築に利用する点がこれまでの研究にはないアプローチである。前提条件操作の限界を意味論・形式語用論の枠組みを超えて、ポライトネス理論などの相互行為的理論との接点から分析するという点で特徴がある。

2. 研究の目的

本研究は、前提を伴う言語形式の運用のしくみを明らかにすることを目的として、近年問題視されている表現をとりまく言語現象を考察する。集団的に前提が操作された使用例に関するインターネット上の情報を聞き手の主観的情報を示すデータとして分析し、前提を伴う言語形式の運用における意味伝達のメカニズムを説明することを目指す。ポライトネス理論は、前提条件の操作を、聞き手との共有部分を強調し、フェイス威嚇行為を緩和するためのポジティブポライトネスと位置づけたが、本研究ではポライトネス誘因が明示されていなければ、前提条件操作は結果的に聞き手に否定的反応をもたらすことを示す。ポライトネス方略のパラドックスのモデルを示すと同時に、前提条件操作という言語現象を説明する。

[参考文献]

- Brown, Penelope and Stephen Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ケネラー[首藤]佐智子 (1999) 『じゃないですか』の使用にみる語用論的制約の遵守とポライトネスの関係 第3回社会言語科学会研究大会予稿集.
- Lewis, David (1979) *Scorekeeping in a Language Game*, *Journal of Philosophical Logic* 8.
- Shudo, Sachiko (2002) *Presupposition and Discourse Functions of the Japanese Particle Mo*. London: Routledge.
- Shudo, Sachiko. (2003) *Politeness paradox in manipulating presupposition*, 8th International Pragmatics Conference.
- 首藤佐智子 (2007) 前提条件操作の限界: 「よろしかったでしょうか」の語用論分析 首藤佐智子 日本語学会第135回大会予稿集 256-261.
- Shudo, Sachiko. (2008) *The Presupposition of too Revisited*. Sachiko Shudo. The 7th Korea-Japan Workshop on Linguistics and Language Processing, Kyung Hee University. Invited paper.
- Shudo, Sachiko. (2008) *How Even Revises Expectation in a Scalar Model: Analogy with Japanese Mo*. Sachiko Shudo. *Proceedings of the 22nd Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*. Invited paper. 2008b.
- Shudo, Sachiko. (2008). *Japanese mo and Korean to in even-like usages: What Gricean Maxims tell us to optimize in a scalar model*. Sachiko Shudo. 日本語用論学会発表論文集第3号.
- Shudo, Sachiko. (2010) *Politeness Paradox: A Highly Intersubjective Presupposition Is Hard to Manipulate*. Sachiko Shudo. *The English Linguistic Society of Japan 3rd International*

Spring Forum. Workshop on “Language, Communications, Intersubjectivity”

Shudo, Sachiko. (2010) Even: expectation and beyond. Sachiko Shudo. 日本語用論学会発表論文集第5号.

首藤佐智子 (2011) 前提条件における間主観的制約の多様性について『言語の間主観性—認知・文化の多様な姿を探る』(武黒麻紀子編) 34-57.

首藤佐智子・原田康也 (2008) 文脈的制約の再構築による前提の特定—助詞モと文脈依存的類義性 首藤佐智子・原田康也 日本言語学会第136回大会予稿集140-145.

首藤佐智子・原田康也 (2009) 言語使用のメタ認知的内省の情報資源としてのインターネット:前提条件再構築の検討を例として 日本認知科学会第26回大会予稿集

Shudo, Sachiko and Yasunari Harada. (2009) Presupposition manipulation as a politeness strategy: politeness through ostensive inferential communication. Sachiko Shudo and Yasunari Harada. 11th International Pragmatics Association Conference.

3. 研究の方法

インターネット上には掲示板やブログなどに日本語の言葉使いに関する一般の言語使用者の感想や意見が書き込まれる例が多く見られる。こうした書き込みから聞き手に否定的反応を呼び起こす複数の言語形式を特定し、その原因が前提の操作である可能性が高いものを抽出した。インターネット上の書き込みなどから、言語形式に関して、使用可能なコンテキストと使用不可能なコンテキストを特定し、前者のみを容認する前提条件を再構築し、伝統的な使用に課せられた語用論的制約として同定した。

伝統的な意味での前提導入表現ではないが、使用時における話し手の情動的態度の存在が語用論的制約の一部とされていた「残念な」の使用形態に関しても上記の手法で分析を行った。語用論的制約に関しても前提操作と同様の分析を適用することが有効であった。「残念な」の使用形態の変遷に関して、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を利用し、伝統的用法と新用法に関する量的考察を行った。これは、「残念な」という語に関する通時的な調査としての役割を担うことを狙いとしたものではなく、語の意味の変遷に関して、母語話者の直感に頼るだけでなく、ある程度の客観的な裏付けを提供することのみを目的としたものである。

4. 研究成果

「気になる日本語」と言われるような言語使用に関しては、インターネット上に非専門家である言語使用者による膨大な量の記述が載せられている。問題とされる言語形態を

使用する母語話者がいる一方で、批判的な記述をする母語話者が存在するという事実は、語用論的制約が全ての母語話者に共有されているわけではないことを示す。本研究では、前提導入表現の操作に対する聞き手の反応は一元的に捉えられるものではなく、個々が持つ前提条件に影響を受けることを示した。さらにはフェイス威嚇行為の緩和策の効力は聞き手が話者の意図を理解することによって伝わるが、その意図が不明瞭である場合には機能しないことを示した。

本研究では、「残念な」の新しい使用法に着目した。伝統的な使用では話し手の情動的態度を伴うことが制約とされていたが、新用法ではこの制約は操作されている。新用法では、形容詞の客観化が起きたと考えられる。客観化が起きたのは、ポライトネス効果を意図した語用論的制約操作による新用法が発生し、この使用が浸透されると当初意図されたポライトネス効果が希薄化し、主観的な感情を伴うという意味が形骸化したためであるという説明を試みた。

客観的表現が主観的意味を獲得していくプロセスは偏在し、そのプロセスを認知的に説明する研究は多い(例えば Sweetser (1990)や Traugott (1995))が、筆者が知る限りではその逆の方向性のプロセスに関して社会言語学的要因を考慮にいれた研究は見受けられない。本稿において、ひとつの特殊な表現に過ぎない「残念な」の意味の変遷に焦点を当てるのは、客観化のプロセスが少なくとも可能であり、その背景にポラ効果を狙った語用論的制約の操作使用が考えられることを1つのモデルとして示すためである。これは、語の使用において、ポライトネスが意図された語用論的制約操作が行われた場合に、その意図が形骸化するという社会言語学的パラドックスが存在する可能性を示唆するものでもある。

日常生活において調整を狙いとした語用論的制約を逸脱した使用は偏在しているはずだが、その限界を同定することは不可能に近い。言語使用者はその限界を暗黙知として認識し、通常は限界を超えるような使用はしない。しかしながら、「残念な」の新用法のような集団的な使用法が偶発的に社会言語現象として出現すると、それは制約に影響を与え、語の意味に変化をもたらす可能性を持つ。語用論的制約条件が操作された場合に調整の限界はポライトネス理論によって説明されるような談話的側面によるものである可能性を示唆している。Lewis (1979)が「ある程度の制限範囲」としたものは、伝統的用法の操作のようにポライトネス誘因が明示的に伝達される範囲までである可能性も考えられる。語用論的制約の操作における調整の限界に関して、普遍的な結論を導くのは、言語形式の語用論的制約の多様な形態を体系的に把握し、より多くのデータの分析が進むのを待たなければならない。本研究では、

ポライトネスに關与する操作が慣習化された場合は、ポライトネス効果は希薄化する可能性を持つというパラドックスが存在することを指摘するにとどめたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

(1) 首藤佐智子 (2015(予定)) 「残念な」の客観化にみる語用論的制約操作とポライトネスの希薄化現象 日本語語用論フォーラム第 1 巻 (加藤重広 (編)) ひつじ書房

(2) 首藤佐智子・原田康也 (2013) 残念な言語現象—ポライトネスの耐えられない矛盾—日本認知科学会第 30 回大会論文集 日本認知科学会

(3) 首藤佐智子・崔在雄・原田康也 (2012) 名詞句連接の日韓対照研究—「NP1 の NP2」と「NP1 의 NP2」の制約の相違と相対的頻度—日本認知科学会第 29 回大会論文集 日本認知科学会

(4) Choe, Jae-Woong, Sachiko Shudo and Yasunari Harada. (2012) A Contrastive Study on the Adnominal Case Constructions in Japanese and Korean Based on Relative Frequency of 'no' vs. 'ui' Language Information: 7 韓国高麗大学言語情報研究所

(5) Choe, Jae-Woong, Sachiko Shudo and Yasunari Harada. (2011) A Contrastive Study on the Adnominal Constructions in Japanese and Korean — Relative Frequency of 'no' vs. 'ui' — 電子情報通信学会技術報告 (信学技報) 社団法人電子情報通信学会

[学会発表] (計 7 件)

(1) 首藤佐智子・原田康也 (2013) 残念な言語現象—ポライトネスの耐えられない矛盾—日本認知科学会第 30 回大会

(2) Shudo, Sachiko. (2013) Zannen? How sorry are you?: a politeness dilemma in manipulated usages 2013 年 3 月 14th Korea-Japan Workshop on Linguistics and Language Processing

(3) Shudo, Sachiko. (2012) Accommodatable Presuppositions: Mutual Knowledge and Mutual Assumptions. 12th Korea-Japan Workshop on Linguistics and Language Processing

(4) 首藤佐智子・崔在雄・原田康也 (2012) 名詞句連接の日韓対照研究—「NP1 の NP2」と「NP1 의 NP2」の制約の相違と相対的頻度—日本認知科学会第 29 回大会

(5) Choe, Jae-Woong, Sachiko Shudo and Yasunari Harada. (2011) A Contrastive Study on the Adnominal Constructions in Japanese and Korean —Relative Frequency of 'no' vs. 'ui'— 電子情報通信学会思考と言語研究会

(6) Choe, Jae-Woong, Sachiko Shudo and Yasunari Harada. (2011) Relations R Us: Semantics and Pragmatics of Adnominal Constructions in Korean and Japanese. International Workshop on Linguistics of BA, Waseda University.

(7) Shudo, Sachiko. (2011) Limits for Accommodation for Presupposition: Mutual Assumptions, Mutual Knowledge and Politeness. International Workshop on Linguistics of BA, Waseda University.

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

首藤佐智子 (Shudo,Sachiko)
早稲田大学・法学学術院・教授
研究者番号：90409574

(2)研究分担者

該当者なし

(3)連携研究者

原田康也 (Harada, Yasunari)

早稲田大学・法学学術院・教授

研究者番号：80189711

武黒麻紀子 (Takekuro, Makiko)

早稲田大学・法学学術院・准教授

研究者番号：80434223